

「居場所」の喪失と回復
— 「いのちの電話」活動の経験から —

Loss and Restoration of “A Place where One Belongs” :
From the Experience of Working at a Telephone Counselling Service

種村 完司

TANEMURA, Kanji

1. 「居場所」問題への私のかかわり

「居場所」についての論稿を求められたとき、この問題と向き合うことに私は少しも違和感がなく、むしろ必然性の意識をもって受けとめることができた。日本社会の中で、子どもから青年、壮年、老人にいたるまで、個々人が心身ともに多かれ少なかれ不安状態におかれ、自分自身にも自分の生活にも充足感をもちえていないからこそ、いま共同して問わなければならない最も切実なテーマになっている、と常々感じていたからである。

個人的なことを語るのを許してもらおうと、私は、哲学および倫理学の研究・教育者として長年送ってきた大学人生活と併行して、学外でいくつかのボランティア活動にもたずさわってきた。とくに「鹿児島いのちの電話」活動には26年以上かかわっており、そのうち約15年間、直接の電話相談にも従事してきた。「いのちの電話」は、自殺予防を主な目的としてはいるが、コーラー（相談者）からの相談内容は、家庭内での喧嘩・暴力・別居や離婚、職場でのトラブル・人権侵害、教育現場での校内暴力・いじめ、経済苦やリストラ、心身の重篤な病い、など実に多岐にわたっている。私の場合、勤務の関係もあって、月一回、週末の深夜時間帯（夜中の10時半から翌朝の8時まで、一、二時間の仮眠を含む）に電話当番をつとめ、そのつど現代社会の矛盾

の深刻さ・多様さに衝撃をうけてきた。

深夜時間帯に電話をかけてくるコーラーには、心の病いに苦しむ人たちが多く。うつ病、強迫神経症、離人症、統合失調症などと診断され、そうした病気と共存しながら生きている人々である。彼らは、日中の明るい時間帯に屋外に出ることができず、寝静まった夜、不安と寂しさを少しでも和らげようと、「いのちの電話」にかけてくる。簡単に解決策が見つかるわけではない。結論が出ず堂々巡りの会話になる場合も多い。彼らのつらい思いをひたすら受容し、共感的な理解に努めることが相談員の主な仕事になる。長時間の忍耐強い対話をつうじて、暗い気持を少しでも晴らしてもらい、自死を考えていた人には「もうちょっと生きてみようか」と思ってもらい。ささやかだが、それが目的なのである。

それにしても、この種の精神病理の発症には、必ず原因やきっかけがある。じつと電話を聴きつづけると、親子間での虐待や暴力、学校や職場でのいじめ、人生途上での深刻な挫折・破局などが、浮かびあがってくることが多い。さらに、こうした重篤な心の病いに陥った人たち以外に、現代の社会病理のただ中で、ひじょうに強い不全感や疎外感を訴えてくる人も少なくない。訴えの根っこには、社会に受け入れてもらえない、自分らしく生きることができ

ていない、言葉をかえれば、「居場所がない」「居場所を失いつつある」という実感があり、その実感の背後には、労働や仕事の面での抑圧や不自由、人間関係の面での歪みや崩壊がある。社会のいろいろな分野で、一個の人格として承認され尊重されていない人がいかに多いか、ということの証であろう。

「いのちの電話」活動をつうじて私が受けとめた相談内容の中で、居場所を喪失した（および喪失しつつある）事例と回復した（および回復しつつある）事例を以下に紹介しようと思う。だがその前に、そもそも「居場所」をどう理解すべきか、を問う必要があり、それと関連させて具体的な諸事例をいくつかの分野にわたって記述してみることにする。

2. 「居場所」をどのように理解するか

今日、人々が一般に「各人は自分にふさわしい居場所をもつ必要がある」とか「今の私には居場所らしきものがない」とか言うとき、その「居場所」とはどのようにイメージされ理解されているのであろうか。

この言葉のうちには、個人のおかれている環境や社会にたいする心理的ないし感情的な受けとめ方が表現されているとともに、個人がおかれているリアルな客観的条件が表現されている。つまり、主観的な実感と客観的な事態が同時的に示されており、時にはしばしば、実感と事態の両者が混じり合っ、あるいは融合して言い表されている。

私は、「居場所」という言葉を、第一に、家庭・学校・職場・地域等で、自分自身が安全であるという実感、気楽で安らげているという心理だ、ととらえるように思う。

こう述べるとき私は、『経済学・哲学草稿』の中でマルクスが書いた、有名な次の記述を想起してい

る。「労働者は、労働の外でやっと自分のもとにあると感じ、労働のなかでは自分の外にあると感ずる。彼が家にいるように安らいでいるのは労働していないときであって、労働しているときには、彼は安らぎをもたない。」疎外された労働は安らいだ心身状態の反対物である。この文には、強制から解放された「安らぎ・気楽さという感覚」が大切であることへの注目・重視がある。まさに気楽な場所に身をおいているという安心感こそ、まずは「居場所」観念の一つの本質だというべきであろう。

とはいえ、こうした気楽さや安心感が成り立つには、それを保証している客観的な条件がなければならない。すなわち第二に、居場所とは、ある人が周囲の者からその場での存在を承認されている、さらには尊重されている、という事態だと考えられる。

「君はこの集団の中にももらっていいよ」「このグループの一員として必要な存在だ」という周りからの了解であり、包摂である。個人の主観的な思い込みではなく、個々の成員を受け容れるこういう人間関係や客観的な状況があつてこそ、個人の安心感や気楽さも確かなものとなり、より長続きするはずである。

これらに加えて、居場所にはさらに一歩すすんだ段階があるように思う。人間はただその場にどまっている存在ではなく、つねに自分の意志で行動し何かを生み出す存在である。この面を重視すると、第三に、一歩すすんだ「居場所」の観念とは、活動によって、活動の成果によって自分の存在意義が認められている、という事態だ、ととらえることができる。自分がたずさわる活動や仕事をつうじて、自分が周囲から正当に評価されることほど、大きな充実感（言い換えれば「自己確証」）が得られるものはない。逆に、活動プロセスや活動成果が無視され、不当に扱われる場や集団では、誰も自分の居場

所を確認できず、「自分は無用の人間だ」「無価値な存在だ」と卑下し絶望することだろう。「居場所」観念をわれわれの生活の中で深い人格的意義をもつものとして理解するためには、今日とくに人間の主体的意志や社会的活動と結びつける必要がある。

そして、活動と成果をつうじて周囲から自分の存在意義が承認されるという事態は、個々人の日常的な信念と結びつき、それを定着し強化することになるだろう。私は、第四に、居場所とは、自分のやりたいことができている、自分の得意分野に専念できている、という個人の確信や自己実現感覚でもある、ととらえている。厳しい経済状況や労働環境のもとで、ここまで高い「居場所」観念をもちうる恵まれた人はごくわずかだ、との批判も出るかもしれない。私も、これが容易ではないこと、むしろ現代では理想に近いことを否定しない。しかし、人間的な生を追求しようとするなら、こうした居場所観念をいつまでも理想の域にとどめず、困難な中でもたえずそれを現実化する試みが不可欠だと思う。

3. 「いのちの電話」の中の諸事例

(1) 居場所を喪失してしまった事例、喪失しつつある事例

私が受けた相談の中で、家庭や職場で「自分の居場所を感じるができない」というたぐいの訴えが少なくない。「居場所」という言葉を使わなくても、「いつも不安だ」「いたたまれない」「だれも認めてくれない」という言葉が発せられるとき、「居場所がない」という感覚なんだな、と受けとめることにしている。

30歳代の主婦から、「2年前の夫の浮気以降、喧嘩がたえない。一度子どもを連れて実家へ戻ったが、親に諭されて自宅に帰り、8ヶ月になる。言い合いになると、夫からの殴る、蹴るの暴力がひど

い。離婚したいがどうだろうか。」との相談があった。この女性にとって、もはや家庭は自分の居場所ではないという意識が強く、夫は彼女にとって居場所の破壊者でしかない。いや、夫の側でも、愛情を失った妻との共同生活の中に居場所を感じられなくなっていることだろう。これほどの暴力沙汰までいなくても、愛と信頼が消失した夫婦からの、別居や離婚の相談は著しく多い。その中で私にとって印象的なのは、妻の側にある、人生をやり直したい、新しい居場所を見つけたいという強い思いである。しかし、経済的に夫に依存してきた専業主婦は、離婚をためらうケースが多い。「離婚できない病理」と言っているかもしれない。今日の日本では、なお経済的な非自立性が不幸な婚姻生活からの脱却を妨げていることを、多くの事例から教えられる。

学校現場での陰湿ないじめは、子どもたちにおける居場所喪失の典型的な現象である。いろいろなケースのいじめ相談が寄せられたが、中でもとくにひどい例があり、電話を受けるこちら側の気持ちが落ち込んでしまうほどだった。県外から転校してきた中学2年の男子生徒が、集団で長期にわたり執拗にいじめられたケースである。被害者は、体育館やボールの隅っこで、裸にされ、みなの前で裸踊りを強制されたり、休み時間にトイレでズボンやパンツを脱がされ、見世物にされた。担任の教師はうすうす感じてはいたようだが、介入しようとはしなかった。両親が校長先生に訴えてみたら、とアドバイスしたが、本人は「なんとか耐える」と決意を述べて電話を切ることがしばしばだった。1年後、彼が再び父親の転勤に伴って県外へと転校することになり、幸か不幸か、私との電話のやりとりはそれで終わりになった。いのちの電話の相談員は、悩みを受けとめることが主であって、本人が求めなければ（死の予告を除いて）、行動を起こせない。その意

味では、無力である。教師も学校も、親や保護者も知らない場所と時間で、子どもたちの人権が侵害され、居場所が剥奪されているという事実を思い出すたびに、今でも暗澹たる気持ちになる。

大人社会ではどうだろうか。職場では仕事がキツイ、労働時間が長い、上司が横柄で不親切だ、などの訴えが相次いでいる。たとえば、20歳代後半の看護師から、「7年間外科系の病棟勤めをしているが、急患も多く仕事がハードで常に緊張を強いられている。10歳年上の先輩にキツイ人がいて、人間恐怖症になりつつある。」との訴えがあった。自分はこの仕事に向いていないのでは、と彼女は深い自信喪失の状態にあった。労働条件の過酷さが彼女の自信を失わせ、居場所の喪失感を生み出していることが、私には感じとれた。

会社の営業関係に勤める労働者からの訴えには、さらに切実感がある。「リストラされて警備員に転職した人もおり、営業部門は減らされた10名以下の人間の手で、以前と同じ業務をこなす必要がある。労働時間も長くなり、直属の上司は、メーカーの指示に従うだけで従業員に配慮してくれない。」という憤りをこめた訴えである。健康な心身を維持しながら働きたいのに、激しくなる一方の企業間競争のもとで安全な労働環境が保証されず、働きがいますます縮小していく感覚、つまり居場所であるべき職場への信頼が一途にやせ細っていく、という実感が表明されている。

学校現場で苦闘する教師たちからも悲鳴が届いている。4年目の若手教員からの訴えによると、「4月に転勤した二度目の学校では、校長の権威主義的な指導と管理のせいで、若い者がつらい思いをしている。教師間にいじめがあるのに、組合も弱くて、それを正すことができていない。年配の教師は勤務時間内に無断で帰ったり、学内業務が若手に偏り、き

わめて不公平な状況にある。最近ストレスで胃が痛くてたまらない。」と。こういう事態が改善されなければ、この教師はますます居場所を失っていくことになる。心身面での深刻な疾病発生の心配すらある。もちろん、このような学校ばかりではないにちがいない。先輩と後輩とのフランクな経験交流、校内分掌の公平な分担と相互協力などを実現している学校もたしかにある。だが、よく指摘されるように、生徒間のいじめを見逃している学校では、教師自身の権利感覚が希薄であり、教師間の連携や協力が弱くて各人がバラバラになっていることが多い。個々の教員の「学校＝居場所」実感が弱いということは、実は学校じたいの非教育的・非人間的性格が支配的になっていることの現れであり、まずはそれに気づかなければならないと思う。

いくつか特徴的な居場所喪失事例を挙げたが、総じて言えることは、家庭でも学校でも会社でも、居場所をますます矮小に窮屈にしている背景に、今日の日本社会の厳しい経済情勢があり、それに影響されて出来している苛酷な労働環境があるように私には感じられる。多くの組織で導入されている、成果主義や能力主義の強まり、上意下達型の人間関係、正規労働の非正規化という諸条件が、それに拍車をかけていることはまちがいない。

(2) 居場所を回復した事例、回復しつつある事例

「いのちの電話」には、悩みや苦しみを訴えずにはいられない人たちからの相談が圧倒的に多く、苦悩から解放され幸福を取り戻した人たちからの報告や表白はきわめて少ない。電話相談という活動の宿命であろう。それゆえ率直に告白すれば、居場所を回復した事例、回復しつつある事例は、残念ながら十分には紹介できない。それでも、十全な回復とはいえないが、回復の一步を踏み出したといえるケ

ースは多少なりともある。

たとえば、40歳代前半の女性からの電話があった。「15年間一緒に暮らした夫から自分と娘への日常的な暴力があり、別居を決意した。株に夢中で、しかもお金に執着する夫は預金通帳をにぎって離さない。大型車の免許を取得して今アルバイトを始めた。離婚になったとしても、自分なりに生活していく自信がある。」と。夫に経済的に従属していた境遇を自ら断ち切って働き始めた女性が、新しい居場所づくりに一歩踏み出したケースである。労働ないし仕事に就き、経済的に自立することが、居場所回復の重要な条件であることを教えられる。

大学の建築科を卒業したという30歳代後半の男性から、やや希望に満ちた電話があった。「自分は学生時代にバンドや芝居に夢中になり、留年したために故郷に無理やり連れ戻された。いろんな職場で失敗し、今は精神科に通っている社会的不適応者だ。だが、二級建築士資格をもっているおかげで、来週から仮採用で勤められるようになった。やっと自分の求めているものが見つかった気がする。」と。これからの職場での仕事が彼に真の生きがいや自信をもたらすかどうかはなお未知数である。しかし、自分の能力や個性を多少なりとも生かせる職業に就くことになった事実は、新しい居場所獲得にむけての貴重な必要条件であろう。

これとは反対の事例もある。30歳近い女性からの訴えだった。「10年前、看護師になりたかったのに、父親から『おまえの成績ならもっと高い地位の職業をめざせ』と激しく反対され、それで神経をわずらった。離人症と診断され、一生治らないと主治医から言われた。」というケースである。(1)の居場所を喪失した事例で挙げるべきケースだが、自分のやりたいことができている、自分の得意分野に専念できている、という確信をもちつつある場合と、

根本からその確信を失った場合との、対照的な事例だといえるように思う。

自分にふさわしい居場所がないと日々痛感している人々は現代では多い。しかし、自ら動かなければ、ほんものの居場所は得られない。もちろん、保護が必要な子どもたち、重篤な障害をもつ人々には、安心できる居場所が提供されなければならない、またその獲得のためのサポートが必要だ。だが、自分なりに決意し行動できる人は、自分の居場所を求めたり、創ったりしなければならない。実は、「いのちの電話」という活動も、参加者たち自身の居場所回復運動の一環だということができる。

いのちの電話に参加しているボランティア構成員は、それまで多種多様な人生を歩み、さまざまな悲哀や危機を経験してきた人たちだ。私の知るかぎりでも、大学生の娘が自殺した女性、40歳代に心筋梗塞で夫を亡くした女性、進行性胃ガンの妻の闘病生活につきあった男性など、いろいろな人がいる。そういう自分の体験を電話相談員として活かしたいと願い、相談活動の中で自分の人間性向上を志し、相談員仲間との交流をつうじて自分の居場所を見つけ、自らのアイデンティティを確かなものにしようとする存在なのである。

今日、居場所の名に値するものは、安らぎのある家庭、楽しく学べる学校、仕事にやりがいのある職場などであろう。それらに加えて、参加していて充実感が得られる自由で平等な各種のボランティア組織・団体が挙げられる。たとえば、図書館にかかわる二つの事例を紹介すると、大学卒業後なんども就活に失敗し、引きこもり状態にあった女性が、図書館利用者からボランティア、さらに臨時職員として、地域図書館内に居場所を見つけた、というケース。長く引きこもっていた30歳代姉妹が、図書館

で使う子どもや高齢者向けお話し小道具の手作りに参加することによって、新たな生きがいを得られた、というケース。いずれも、社会とつながり他人に喜ばれる活動を始めることによって、居場所が回復されたのである。日本各地では、生きがいや居場所を失わせるような格差、競争、不自由の風潮が著しい。その中で、人間的な友愛や信頼を育む、小さいながらもオープンで自由なコミュニティの成立や活動が、そうした全体的風潮に抗する重要な防波堤になっている。

【追記】「いのちの電話」では、原則として相談員は自分の名を明かさないことがきまりである。私の場合、鹿児島県の組織内で広告塔の役割をも担っているメンバーなので、私を含む数名は例外として氏名の公表を許してもらっている。また、本文で紹介した諸事例は、相談年月、電話の発信地、問題の発生場所などが明らかにならないよう、相談者のプライバシーに配慮して叙述したことをお断りしておく。なお、いのちの電話活動への関与の経緯、この電話相談の目的や方法、そのコミュニケーションの特色などについては、拙著『コミュニケーションと関係の倫理』（青木書店）中の「補論 『いのちの電話』と人格的コミュニケーション」を参照していただければ幸いである。

種村 完司（鹿児島県立短期大学／哲学，倫理学）